



Newsletter

映像メディア英語教育学会 九州支部

The Association for Teaching
English through Multimedia (ATEM)
Kyushu Chapter



第18号

2022年(令和4)年2月1日

映像メディア英語教育学会 九州支部事務局 発行

〒890-8565 鹿児島県 鹿児島市 高麗町6-9

鹿児島女子短期大学 石田 もとな 研究室

TEL: 099-254-9191(代)

Email:k_office@atem.org

URL: http://atem.org/kyushu/

編集: 福田 浩子

Contents

巻頭言 Page1 支部大会報告 Page1-2 国際大会報告 Page 3 映画コラム Page4

ATEM 九州支部 2022

ATEM九州支部会員の皆様

ニュースレター第18号(2022年号)がこのように完成いたしました。本号では、2021年度の支部及び学会活動を中心に紹介しています。また、九州支部メンバーによる映画に関するコラム(「Stay Home! 映画鑑賞のススメ」「英語教員推薦! 教育現場で役立つ映画」)も掲載されています。ぜひ楽しんでご覧ください。

さて、2020年に突如としてコロナ禍に突入し、最初の1年はその渦中でただただ翻弄される年でしたが、2021年はその中で試行錯誤を繰り返しながら、なんとか前進した一年だったように思います。本学会では、2020年には支部大会・全国大会ともにキャンセルとなりましたが、その間に蓄積したノウハウを活かして、2021年には3月と9月に九州支部大会、11月に全国大会(国際大会)を、いずれもZoomでのオンライン形式で行うことができました。

9月4日(土)に行われた九州支部大会は、オンラインながらも楽しい大会でした。当日は福岡、熊本、宮崎、鹿児島、沖縄と、九州各地の先生方にご発表をいただくことができました。また会場にも九州支部会員の皆様はもとより、全国各地からご参加をいただきました。対面での実施がかなわなかったのは残念ですが、オンラインならではの良さも感じられる大会となりました。とはいえ、2022年度こそは、安心して直接顔を合わせての大会が行えることを願っています。皆様も今しばらくお体にお気をつけてお過ごしください。

映像メディア英語教育学会九州支部
支部長 吉村 圭(九州女子大学)

第23回 支部大会報告

第23回大会は緊急事態宣言発出中での開催のためZoomでのオンライン形式で開催しました。



<開催情報>

■日時: 2021年9月4日(土) 13:00~16:00

■実施方法: Zoom

<発表プログラム>

シンポジウム 13:15 - 14:15

「映画で育む批判的思考力—映画音楽に写し出された社会問題」

秋好 礼子 (福岡大学)
砂川 典子 (九州ルーテル学院大学)
吉村 圭 (九州女子大学)

今回のシンポジウムは、「映画における音楽の教育的価値を考えると」という主題のもとに、3人のシンポジストにより、そこに映し出される社会問題を見だし、それが英語圏文化・文学教育野中でいかに生かされるかについて実践報告を交えた考察が行われた。

秋好は“*Hairspray*”を題材に、ミュージカルの脚本と同名映画では全く違うシーンで使われているアフリカ系アメリカ人の積年の想いを訴えるメッセージソングを中心に考察を行った。

砂川はミュージカル映画“*Oliver!*”を用い、英米文化・英米文学研究の一例として、ゼミの学生が研究テーマとして英国・ヴィクトリア朝の政治的社会的状況や社会保障制度などの課題を見つける手助けとなることを報告した。

吉村は“*Winnie-the Pooh*”を取り上げ、小説家 A. A. Milne の小説及びディズニーによる一連の映画化作品について、とりわけジェンダーの観点で詩／歌詞に着目した例を講義での学生の反応を交えて紹介した。

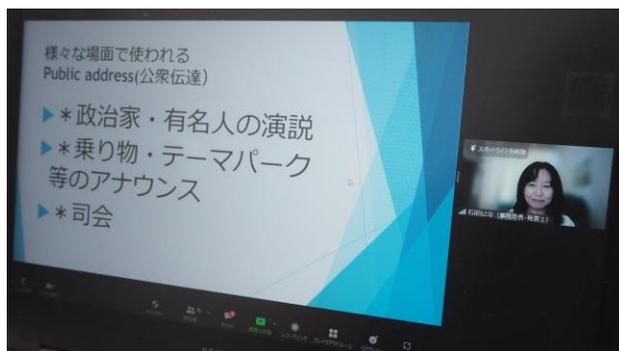
研究発表 14:20 – 15:50

Session 1

Public address における呼びかけの言葉に見るジェンダー意識の変化について

石田 もとな (鹿児島女子短期大学)

映画や YouTube の動画から新旧の Public Address を複数参照し「呼びかけ」について多様性とジェンダーへの配慮の観点から検証を行った。



Session 2

学生を諦めさせない授業 — 専門内容で知的好奇心を、映画でやる気を刺激する —

南部 みゆき (宮崎大学)

看護学科の学生を対象にした医学英語の習得について『私の中のあなた』と『アリスのまままで』を取り上げ、学生からのコメントシートの分析を基に、学生のやる気を落とさせない指導方法を紹介した。



Session 3

アメリカ映画の Disclaimer (免責事項) とその周辺の分析—異文化理解の試み—

兼本 円 (琉球大学)



通常映画終了後に明記されている Disclaimer (免責事項) とその周辺の分析を行い、アメリカ文化・文化理解を促進する貴重なデータであることを報告した。

今回もコロナ禍ということで前回に引き続き 2 度目の Zoom 開催となり、オンライン開催の関係上、シンポジウム 1 題と研究発表 3 題ではありましたが、活発な質疑応答も行われて有意義な会となりました。

当日は、九州圏内はもとより全国各地からも多くの皆様にご参加いただき、オンライン大会の良さが感じられる大会となりました。

ご参加いただきました皆様方に感謝を申し上げます。



第 26 回全国大会報告

2021 年 11 月 6 日（土）に、第 26 回国際大会がオンラインで開催されました。韓国の姉妹学会 STEM（The Society for Teaching English through Media）との交流を始めて昨年が 20 年目でしたが、今大会において共同発表等の記念行事が行われました。九州支部は STEM と縁が深く、支部の先生方も今後ぜひ韓国でのご発表をご検討いただければと思います。



（開会式：STEM 会長挨拶の様子）

九州支部発案の SIG シンポジウムでは、「映画音楽に見る社会問題：差別・貧困・ジェンダー」というタイトルで、秋好礼子、砂川典子、吉村圭の 3 名で、映画音楽を文化・文学の授業でいかに活かせるかについて発表しました。

歌詞が映す多様性—BLM を経た Hairspray の読み直し
秋好礼子（福岡大学）



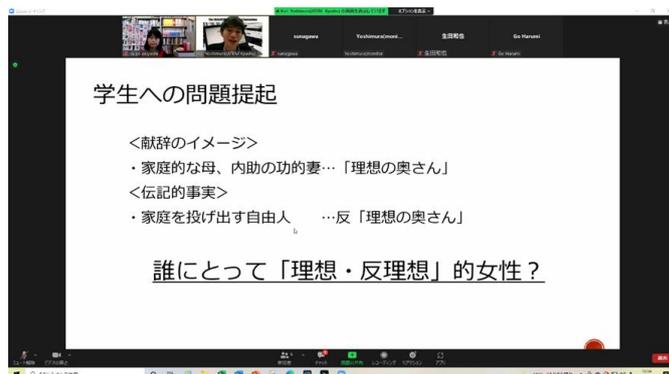
ヴィクトリア朝の理想と現実—Oliver ! における貧困に生きる子どもたち

砂川典子（九州ルーテル学院大学）



Winnie-the-Pooh に詠われたジェンダー：詩／挿入歌にみる母親像の問題

吉村 圭（九州女子大学）



入会案内

ATEM 九州支部では新規会員を随時募集しています。会員登録はホームページから受け付けています。ご不明な点は支部事務局（E-mail）までお気軽にお問い合わせください。

Website : <http://atem.org/kyushu/>

E-mail : k_office@atem.org

Twitter : <https://twitter.com/9atem>



Stay Home ! 映画鑑賞のススメ

2021年は東京オリンピック・パラリンピックが開催されました。特にパラリンピックでは、「Diversity」という視点から個性を全面に出して大活躍を納めた多くの選手たちをたたえる人々でいっぱいでした。見た目の違いや障害があっても出来ることを一生懸命やろうという気持ちと、そばにいる人への感謝の気持ちがあふれていて、見ている方も Happy な気持ちになりましたね。

今回はオリンピック・パラリンピック同様に感動を与えてくれる「ミュージカル映画」を紹介したいと思います。

◆◆ RENT (2005年) ◆◆

舞台は1989年～1990年 ニューヨーク・マンハッタン 主人公はイーストビレッジのボヘミアンの若者たち。「HIV陽性」「ドラッグクイーン」「薬物依存症」「バイセクシャル」「映画監督を目指す貧しい若者」など、当時の時代背景を色濃く写し出しており、現在は随分と認識されてきたLGBTQや治療が確立されてきたHIVですが、当時は表舞台にはなかなか出てこない時代でした。

この映画の中で特に印象深いリリックが

“Season of Love”

Five hundred twenty-five thousand six hundred minutes

How do you measure a year in the life?

How about love

一年は5,256,00分だけど、あなたは一年をどう測るのがいいと思う？例えば“愛”で測るのはどう？ブロードウェイのミュージカル作品でもあり、全編でながれる楽曲が素晴らしい作品です。

◆◆ Greatest Show Man (2017年) ◆◆

19世紀に活躍した興行師 P・T・バーナムの活躍とそのショービジネス（フリークショー；小人症、大男、髭の濃い女、結合双生児など世間から隠れて生活しているような人々を集めて行ったサーカス）でいわゆる「マイノリティの人々」の奮闘とその苦悩を描いています。

I'm not a stranger to the dark

But I won't let them break me down to dust

I Know that there's a place for me

For we are glorious

I am brave, I am bruised, I am who I'm meant to be,

This is me

I'm not scared to be seen

I make no apologies, **this is me**

劇中で歌われるこの「これが私！」と力強く歌い上げる歌詞に力をもらった人は少なくないでしょう。

私たちの未来が個々の個性を尊重した素晴らしい未来となりますように！！ 福田浩子（福岡大学）

英語教員推薦！教育現場で役立つ映画

◇◇ My Sister's Keeper (2009) ◇◇

医療系の学部で働いているので、知らず知らずそういう系の映画やドラマを意識してしまうのは、職業病みたいなものかもしれない。専門性たっぷりのストーリーも刺激的で面白いが、病む人を支える医療プロフェSSIONナルや家族、という視点もいつも持っていたい。そのようなまなざしの映画は、医学生よりも看護学生に好評だ。（うーん、このあたりは学生のうちからこうも違うのか…と少しさびしくなるのだが）

今年、看護学科の英語の授業の一部で My Sister's Keeper を5回に渡って扱った。視聴した日の授業終了時は、「次の授業に行く前に、鼻をかんで顔を洗ってね」と声掛けしながら、目を赤くして教室を出ていく学生を見送った。事実私も、涙が出るのを我慢していた。フィードバックシートも多くの感想で埋まった。洋画をあまり見ない、或いは全く見ないという学生が増えている事実にはもう驚かないと思っていたが、「洋画を見ても泣けるんだ一、ということにすごく驚いた」というコメントには、思わず苦笑。良かったね、新しいトピラが開いて、と伝えたい。



この映画（原作本も含めて）は例えば欧米では、医療倫理面のディスカッション材料として使われることも多いそうだ。実際今回も、私がクドクド言わなくても学生たちは自ら重要なディスカッションポイントを見出していた。「人権とはなんだろう？ということはずっと考えながら観ていた」や「ケイトを救いたい、という思いはみんな一致しているのに、個々の行動はすごく違ってる。なんか深い」、「医療人としてどこまで踏み込むべきか、とか、その時の判断はすごく難しい」等々。こういうコメントを読むと、選んだ意味があった、と少しホッとする。卒業後の進路がはっきりしている学生にとって、低学年のうちからプロフェSSIONナリズムを意識してもらうためにも、映画の活用はやっぱり効果大だなあ、と思う。

南部 みゆき（宮崎大学）

編集後記

コロナ禍で医療系の略号が飛び交っていますね。ECMOはextracorporeal membrane oxygenationの略で「体外式膜型人工肺」のことです（医学部の試験に既出）。今後映画でも取り上げられるかも。（HF）